

次世代育成を目指す仏教施設の役割・意味・ネットワーク調査

榎木美樹

(龍谷大学アジア仏教文化研究センター2010年度公募研究員・独立行政法人国際協力機構)

目次

1. 研究課題
2. ナーグプル以南における改宗・決起集会
3. 禅塾
4. 禅塾の土地と運営をめぐる問題
5. 結論と課題

【キーワード】

仏教徒運動、仏教への改宗、アンベードカル、ビジャプル市（カルナータカ州）、禅塾、次世代育成

1. 研究課題

1-1. 研究の目的

インドにおける仏教への改宗は、近年、仏教徒運動のメッカたるナーグプル市（マハーラーシュトラ州）以南においても活発である。それを牽引するのがインド人のボディ・ダンマ僧侶（Bhadant Bodhi Dhamma）¹で、ボディ僧侶は2000年ごろからカルナータカ州およびアーンドラ・プラデーシュ州における改宗活動を重点的に行ってきた。南部インドにおける活動に勢いをつける出来事として、2003年のバンガロール（カルナータカ州の州都）における8万人の大規模集団改宗の挙行がある。

この大規模改宗と同じ年、カルナータカ州ビジャプル市に仏教思想に基づく青少年育成施設として禅塾（英語名：Bodhi Satva Dr.Babasaheb Ambedkar Bhikhu Academy, Indo-san Sogenji Zen Monastery）が設立された。ここでは未成年の男子が寄宿生活を通して学校教育を受けるとともに仏教教義や禅について学び、塾を卒業する時には僧侶になることが奨励される。

1956年の集団改宗挙行以降、インドにおける仏教徒運動は、当事者による仏教への改宗といった短期的かつ直接的な行動が注目されるが、一方で、改宗後の信仰維持や仏教徒の再生産のサイクルといった中・長期的な問題については不明な点が多い。本件調査は、次世代育成に取り組む青少年育成施設の実態とそこを利用する人々の動機や属性を調査することで、仏教的青少年育成施設としての禅塾の役割・意味・ネットワークを検証し、中・長期的な視点で活動するインド仏教徒の視座とそのコミュニティの実態に迫るものである。

なお本稿の第2～3章は2011年1月に京都市で開催されたRINDAS²国際シンポジウムにおいて発表した内容を加筆修正したものである。

1-2. 調査の方法

本件調査では、この禅塾に通う子弟およびその親族への属性調査を実施し、禅塾に入塾する子弟の家庭環境、入塾理由、実家における周辺コミュニティとの関係などを塾生本人とその親族の視点から聞き

¹ 1961年、インド共和国マハーラーシュトラ州ナーグプル市生まれ。インド社会では不可触民とされる階級の出身。生家は仏教徒であったが、政府へはヒンドゥー教徒（マハーール）として登録していた。高校生になるまでは、自分の出自を自覚することはほとんどなかったが、高校時代の差別体験により、自分が不可触民であることを強く自覚し、カーストを超える存在として仏教徒となり出家した。その後、佐々井秀嶺僧侶の紹介により、ビハール州ブッダガヤにある印度山日本寺（仏教寺院としての宗教行為のほか、インドの宗教福祉法人として、無料保育施設や無料医療施設等の社会事業を展開する組織）で2年間修行。1986年（25歳）、臨済宗南禅寺派の富士玄峰僧侶の紹介により、岡山県の曹源寺（臨済宗妙心寺派）に入り、15年修行。1995年以降は、1年のうち2ヵ月はインドで活動する機会を設け、日本とインドの往復という生活をする。2000年（39歳）頃よりインドでの活動を本格化し、ナーグプル市以南を中心に活動している。

² RINDAS とは、人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」龍谷大学拠点龍谷大学現代インド研究センター（Center for the Study of Contemporary India at Ryukoku University）の略称である。

取り、仏教的青少年育成施設としての禅塾の役割・意味・ネットワークを検証した。

禅塾において塾生から家族構成などの基礎情報を聞き取り、後日、塾生の実家や所属コミュニティを訪問して情報の確定・修正を行ったものである。

1-3. 調査期間

- 2010年10月14～26日（ナーグプル14～18日、カルナータカ州19～26日。うちビジャプルは19～22日）
- 2010年11月4～7日（ハイデラバード4日、ビジャプル市他、塾生の自宅訪問4～6日、ハイデラバード7日）
- 2010年12月2～5日（ラクナウ2日、カンプール3～4日、ラクナウ5日）
- 2011年2月25日～3月2日（バンガロール25日、ビジャプル26～2日）

2. ナーグプル以南における改宗・決起集会

2-1. ボディ・ダンマ僧侶について：アンベードカル思想の継承と発展

ボディ僧侶は、マハーラーシュトラ州ナーグプル市の出身であり、母語はマラーティー語で、ヒンドゥー教では不可触民とされるマハール（Mahar）³をその出自とする。18歳で佐々井秀嶺僧侶（Bhadant Arya Nagarjuna Shurei Sasai）⁴の下で出家して以降、日本での修行期間以外はナーグプル市で佐々井僧侶とともに活動してきた。1994年ナーグプル市において、国際仏教青年会（International Buddhist Youth Organization. 以下IBYO）を設立したのが、彼の独自活動の第一歩であった。以後、活動拠点を徐々にシフトさせ、現在ではナーグプル市以南全域を広く移動しながら活動している。

インド外の下層民衆コミュニティとの連携にも熱心で、海外に移住したパンジャブ州出身の不可触民コミュニティ（チャマール）をイギリスに訪問したり、それらの者がパンジャブ州に一時帰国する際に、当該集落に招かれて集会を開催したりもする。このチャマール・コミュニティはまだ仏教徒では

³ マハーラーシュトラ州で最大の不可触民カースト。マハールの伝統的職業は、死んだ家畜の処理、村役場の前・村の入り口などの清掃、地税支払いのための農民呼び出し、脱穀場の見張り、村・田畑などの境界線の記憶と訴訟における証言などであった。また、その多くは土地なし農民として農業にも従事した。ヒンドゥー教の観点からこれらマハールの伝統的職業は不浄視されており、また加えて、肉食、特に牛肉を食すマハールの習慣は不浄とされた。

⁴ 1935年8月30日、岡山県新見市菅生村別所生まれ。1955年（20歳）に高尾山薬王院（真言宗智山派）にて出家した。1966年（31歳）の時、タイへ留学し、1967年（33歳）にインドを訪れた。当初、ラージギルの日本山妙法寺にて修行するが、日本への帰国の前日、龍樹のお告げによりナーグプル市へ赴き、指導者を失い困惑していた仏教徒を宗教的・精神的に指導するようになった。1987年、インドに帰化し、現在は太極拳運動（1992年から開始され、太極拳の管理権獲得のための断食・デモ行進など）を推進した。近年は仏教遺跡発掘にも取り組んでいる。BJP政権下、2002年にはNMC（National Minority Commission：マイノリティ委員会）の委員に任命され、3年の任期を務めた。佐々井秀嶺の活動については〔島1995〕〔白鳥1995〕〔山際2000〕に詳しい。

ないが、アンベードカル⁵に強い関心を示している。

ボディ僧侶は常に仏教僧の衣を着用しているが、教学や説話といった仏教関係の話よりはアンベードカルに関するエピソード、著作、演説内容に関する話に割く時間の方が圧倒的に多い。本件調査時でも、アンベードカルが下層民衆に対して付与したもの、それを現代の自分たちがどのように継承していくか、差別をどのように受け止め、いかに克服していくかという話を中心であった。ボディ僧侶の中ではアンベードカルの考え方、述べたこと、成したことの全てを理解し実践すること、それこそが仏教への理解であり実践であると考えている。「アンベードカル」を知ることが仏教を学ぶことであり、逆に仏教を学ぶことはアンベードカルを学ぶことであるため、アンベードカル理解を欠いた仏教というのはあり得ないという理解である。

アンベードカルの出自と人生は、州や言語を超えて、まだ不可触民としての生活を強要されている人々に対し、希望と活路を開くという信念がボディ僧侶にはある。ボディ僧侶が頻繁に使用してする言葉として“our people”という言葉がある。これはマハールではないけれども、同じような思いをしている人びと、同じような生活を強要されている人びと、カースト・ヒンドゥーからひどい扱いを受けている人びと、といった多義的な意味を持つ。ボディ僧侶は、厳密にこの言葉の意味を定義することはしないが、参集した人びとが、それぞれの思いで解釈しながら、時に涙しながらボディ僧侶の話に耳を傾けていたことは印象的であった。ボディ僧侶はヒンディー語、マラーティー語、英語で話すが、必要に応じてキーパーソンたるコミュニティの有力者やその息子が現地の言葉に直して、通訳形式で集会を行う。

ボディ僧侶の活動は2000年ごろから南インドの中でもカルナータカ州およびアーンドラ・プラデーシュ州における改宗活動に力点を移し、現在の形式をとるようになった。特に2003年にはバンガロール（カルナータカ州）で8万人規模の集団改宗を挙行し、活動に勢いがついた。

2-2. ボディ・ダンマ僧侶による決起集会の流れとパターン

ボディ僧侶は下層民衆の集落を訪問し、仏教への改宗式を挙行することに加え、改宗前後の集会やイベントを企画・実施する。本件調査では、OBC（その他の後進階級）やムスリムが隣接する村に居住しているケースもあるが、いずれもホラヤ（Holaya）あるいはマハールと呼ばれる人々が大半を占めていた。

⁵ Bhimrao Ramji Ambedkar (1891–1956) . コンカン地方の不可触民マハールとして生まれた（14人兄弟の末子）。不可触民として当時異例の教育を受け、アメリカ、イギリス、ドイツ等への留学の後、1922年に弁護士資格を取得した。1924年ごろから弁護士として不可触民問題に取り組むと同時に、政界に進出し1930–40年代には不可触民解放運動の指導者として、マハーラーシュトラ州を中心に活動を展開した。1942年に労働大臣、1947年に法務大臣として入閣し、憲法起草委員会委員長として1949年にインド共和国憲法を發布した。1956年10月14日、ナーグプル市において仏教への集団改宗を挙行し、同年12月6日に病没した。いわゆる「新仏教徒」からは父とも菩薩とも尊敬される。「不可触民の父」と呼ばれ、近年は、仏教徒に限らず指定カースト（元「不可触民」）やその他の下位カーストからの尊敬も集める。

アーンドラ・プラデーシュ州の一部地域には、元ナクサライト（共産主義武装集団）の活動家もいた。

手法としては、アンベードカル思想を解説・強調しつつ仏教について演説し、時にはデモ行進やシュプレヒコールを用いて、仏教徒の存在をコミュニティ内外にアピールする。挨拶語（Jai Bhim⁶）、白い装束の着用を奨励し、共通のスローガンやキャッチ・フレーズを使用する。

各式典・集会は、ボディ僧侶の移動時間に合わせて 1 日のうちいつでも行われる。各式典・集会ごとの若干の相違と特徴はあるものの、共通して一定の流れとパターンがある。開始から終了までおおよそ 90～120 分程度で、住民の出迎えに始まり、住民の見送りで終わる。決起集会の流れとパターンを時系列で示すと以下ようになる。

- IBYO のメンバーが、一行を宿泊所もしくは幹線道路まで迎えに来る
- 会場到着
- 青年会や地域有力者との打ち合わせ
- ボディ僧侶を含め、ゲストは会場前方に設置されている椅子に着席。聴衆はゴザ・布・椅子などに座る（聴衆とは対峙するような位置関係）
- 会場前方に安置されているブッダとアンベードカルの像・絵画に献灯・献花・献香
- 三帰依文などの仏教経典を全員で唱和（おおよそパーリ語）
- ボディ僧侶がゲスト来訪の目的を紹介
- ゲストによるスピーチ
- ボディ僧侶スピーチ
- ボディ僧侶は布施を受ける
- 記念撮影
- 横断幕や仏旗などを持って、仏教徒宅・寺・集会所などへ移動（一種のデモ行進状態になる）
- 仏教徒宅・寺・集会所で施食を受ける
- 集会関係者への挨拶
- 退出（次の会場へ移動）

⁶ ビームラーオ・アンベードカル（Bhimrao R. Ambedkar）の名前からきており、原意は「ビームに勝利あれ」だが、「アンベードカル万歳」といった意味あいで使用される。広くインドで交わされる挨拶語「ナマステー」のように、他者と対面した際、別れの際などに使用される。より丁寧な挨拶の場合は、「ナマステー」の時と同様、両手を合わせて「ジャイ・ビーム」と言う。



写真1：会場まで先導するバイク隊



写真2：町中での集会後の様子



写真3：仏教徒宅での会議の様子

2-3. 改宗母体

これまで、ヒンドゥー教から仏教への集団改宗は、マハーラーシュトラ州における最大の不可触民階級であるマハール（Mahar）を母体として考えられてきた。マハールの 75%は仏教徒であるともいわれる [Zelliot 1998:127]。1956 年以降の集団改宗も、マハーラーシュトラ州を中心に実施されてきた。佐々井秀嶺僧侶（Bhadant Arya Nagarjuna Shurei Sasai）の改宗活動は、マハーラーシュトラ州、マッディヤ・プラデーシュ州、チャッティスガル州で行われ、いずれもマハール・コミュニティを中心に実施されてきた。したがって、仏教への集団改宗は、マラーティー語もしくはヒンディー語圏のマハール・コミュニティでのみ活発であると考えられてきた。併せて一般に、1956 年における仏教への集団改宗によって生じた仏教徒の 90%がマハールからの改宗者だともいわれているため、仏教徒＝マハールという固定観念は根強い。佐々井僧侶の拠点であるナーグプル市周辺では、マラーティー語で「バウッダ（Buddha）」の意味は「マハール」であるとさえされている。

本論文 2-2 において、調査地のいずれもが元不可触民集落であることは述べた。このとき聞き取ったカースト名称や伝統的職業に鑑みるに、ホラヤ（Holaya）とマハールは同じ不可触民というカテゴリではあるが、州も異なるため別個の集団であると考えられた。しかし、興味深い記述があった。古い著作かつボンベイを中心に述べられたものであるため同一であるとみなすには注意が必要であるが、エントベンによれば、ホラヤはマハールの下位区分だとあり、服装や装飾品はマハールと酷似しているとある [Enthoven 2008(1922): 74-75]。また、「大地の子」（*Bhumiputra*; son of the soil）と称されるマハール同様、マイソール（カルナータカ州）ではホラヤも「大地の子」と称される [Ibid.:75]。さらに、ホラヤはマラーティー語圏のマハール居住地域およびグジャラートなどに分布し、死肉を食す。牛を食し酒類を飲むことも [Ibid.:80-81]、マハールと同様である。職業に関し、死んだ動物の移動・処理、靴製造、農繁期の農作業、村の境界の清掃、村の境界や池の見張り番、隣接する村間のメッセンジャーなどがホラヤの伝統的な生業で [Ibid.:80]、マハールとほぼ同様の役割を担っている。

調査地においては、ホラヤがマハールの下位区分だとの言説に触れることはなかったが、ボディ僧侶

がホラヤ集落に入っていくことができた理由のひとつに、言語・習慣・差別体験等のマハールとの類似性があったことは確かであり、この意味するところがマハールの下位区分としてのホラヤであるならば、ホラヤ集落へのアクセスの容易性は、こうした出自の親和性に強く依存したものとなる。

調査地で出会ったホラヤがマハールの下位集団として位置づけられるなら、その意味において、仏教徒運動は、広い意味でのマハール・コミュニティ内部での動きとなる。しかし、少なくとも今回聞き取った限り、ホラヤ民衆は自身をマハールの傍系だと自称するようなことはなかった。エントーベン⁷の記述はさておき、他者から見て同一/類似であったとしても、当事者が違うと意識しているのであれば、それを尊重する必要があるだろう。今後の調査でさらに明らかにしていく。

3. 禅塾

3-1. 禅塾の運営

ボディ僧侶は仏教を修行するために、インドでの師である佐々井僧侶によって、岡山県の曹源寺（臨済宗）の原田正道僧侶の下に送られた⁷。その影響で、臨済禅の修行で培った瞑想や仏教学を実践する場としてこの禅塾がある。カルナータカ州ビジャプルに 2003 年に設立された禅塾（英語名：Bodhi Satva Dr.Babasaheb Ambedkar Bhikhu Academy, Indo-san Sogenji Zen Monastery）には、11 歳以上の男子なら志願すれば、無条件で入塾できる⁸。ボディ僧侶を支援する日本からの寄付金によって建設された⁹。主にカルナータカ州およびマハラーシュトラ州の子弟が応募してくる由である。寄宿生活を通して仏教教義や禅について学び、塾を卒業する時には僧侶になることが奨励される。

塾内では僧衣を着用して朝夕に勤行を行うが、日中はシャツにトラウザーといった一般的な服装で地元の公立学校へ通って勉強する。食事の準備、掃除などは当番を決めて行う。塾を不在にすることの多いボディ・ダンマ僧侶に代わって、以前は塾生であったボディ・ブラッギヤ僧侶（Rev. Bodhi Prajna. 26 歳）が現在の塾全般の運営管理を行っている。時折、仏教徒や仏教に強い興味を持つ人が、冠婚葬祭や家庭における儀式を依頼しに来る。依頼者の仏教に対する理解度に応じて、ボディ僧侶や、ボディ・ブラッギヤ僧侶が対応する。

2009 年 10 月に筆者が初めて禅塾を訪問した際の塾生の年齢構成は、10 歳 1 人、11 歳 0 人、12 歳 2 人、13 歳 4 人、14 歳 5 人、15 歳 4 人であった（1 人は不明）。これら塾生 17 人およびボディ・ダンマ僧侶、

⁷ 曹源寺は、岡山県岡山市郊外（中区円山）に位置する臨済宗妙心寺派の禅寺である。通常、住職の原田正道僧侶を除き、他は全て海外より来日した修行僧であるため「外国人の寺」としても知られる。

⁸ 現在は男子のみ受け入れている。これは男性指導者が男子生徒を指導し、女性指導者が女子を教育するという価値観に依っている。指導にあたる人材の確保を前提として、将来的には女子も受け入れていきたい由とのこと。

⁹ 岡山県の曹源寺や鎌倉道場にかかわる人々による寄付等で運営されている。

ボディ・プラaggiャ僧侶から聞き取った内容は次のとおりである。

- 塾生の募集は、新聞に公告を出す。応募資格として、SC（指定カースト）もしくはST（指定部族）であること、11 歳以上、男子、禅塾卒業時には僧侶になることなどを記載する。書類審査後、面接をする。
- 応募条件を満たし、本人と親の希望があれば、ほぼ無条件で受け入れる。
- 毎年、60 人程度が応募してくるが、大半は途中でやめていく。
- これらの少年の中から、1 人でも僧侶が輩出できればと思う。
- 親は、禅塾を無料のホステルのような存在と考えているようだ。
- 本来はそのようなことでは困るが、実際に生活する少年が学校教育を受け、仏教を学ぶことで、僧侶になるあるいは別の形で社会の役に立とうと考えるようになればそれでいい。
- そういった場を提供することが、禅塾の最大の意義である。
- 塾生のうち 7/17 人は将来、僧侶になりたいと思っている。
- 塾生のうち 4/17 人は将来、学校教員になりたいと思っている。



写真4：禅塾外観



写真5：塾生たち（2009年10月）



写真6：禅塾内（ブッダとアンベードカルが貼ってある）

3-2. 禅塾における生活

禅塾は、原則的に仏教僧侶育成機関である。10 代の青少年を対象として、見習い僧としての共同生活を通して、学校教育と仏教教育を享受できる施設としての機能を有している。但し、塾生の全員に僧侶になることを強要するのではなく、現段階では入塾者の中から一人でも多く、将来僧侶になる者がいればよい、僧侶にならなくても実際に生活する青少年が学校教育を受け、仏教を学ぶことを通して、将来、別の形で社会の役に立つようになればよいとボディ僧侶は考えている。この意味で、仏教僧を養成することが必ずしも重要なのではなく、仏教的視野で物事を観ることのできる人間を育成することに主眼が置かれている。

ただこの場合、仏教といっても、日本の臨済宗で用いられる經典類、言語使用、価値観、時間観念の枠組みで運営されている。食事の際も、禅寺での食事作法に則り、私語は許されず、決まった形式で秩序正しく飲食行為がなされる。時間や物の配置に関しておおらかなインドにあって、禅塾で実践されていることは規格・規程どおりである。禅宗に関する知識と情報を多少なりとも持った者なら、規律正しい禅の精神がここ禅塾で実践されていることを目撃するだろう。

禅塾運営の資金源が日本の寺院（臨済宗の曹源寺）を取り巻く人々およびその寺院が開催する座禅会¹⁰への出席者の寄付金であることに鑑みると、禅宗的教育を推進するのも納得がいく。

【Time Table】 Indosan Sogenji Zen Monastery, India

Morning	4:40	Wake up Bell
	5:00 - 5:30	Chanting (Pali & Japanese) Kinhin
	5:30 - 6:30	Zazen (Meditation) Han
	6:00	Sanzen
	6:30 - 7:00	Kinhin (Walking Meditation)
	7:00 - 7:30	Shukuza (Breakfast)
	7:30 - 8:30	Soji (Cleaning, outside and inside)
	9:00 - 11:30	Zazen
	10:00	Sanzen
	11:30 - 12:00	Kinhin (Walking Meditation)
Afternoon	12:00 - 12:30	Saiza (Lunch)
	After Lunch 1:50	Rest
	2:00 - 3:30	Teiso (Dhamma Discourse)
	3:30 - 4:00	Nebenorai (Toilet)
	4:00 - 4:30	Sarei (Tea Time)
	4:30 - 5:30	Zazen
	5:30 - 6:00	Kinhin (Walking Meditation)
Evening	6:00 - 6:30	Yakuseki (Dinner)
	6:30 - 6:50	Nebenorai (Bathroom)
	7:00 - 7:30	Kinhin (Walking Meditation)
	7:30 - 8:30	(Discourse on Meditation)
Night	8:30 - 9:00	Chanting (Pali and Japanese)
	9:00 - 9:30	Yaza (Night Sitting)
	9:30 - 10:00	Toilet and Rest
	10:00	Light off

¹⁰ 岡山県の曹源寺や鍊心館道場にかかわる人々による寄付や「菩提心を発（おこ）そう会」という坐禅会への参加費や寄付等で運営されている（現地での聞き取りのまま）。聞き取りでは「・・・発（おこ）そう会」であったが、下記のウェブサイトには「・・・発（おこ）しましょう」事務局となっている。<http://www.urban.ne.jp/home/babaesta/indo10.html>

<http://www.urban.ne.jp/home/babaesta/indo9.html>



写真7: 塾生 (2010年11月現在)



写真8: 食後の勉強風景

INDOAN SOGENJI ZEN MONASTERY

Osesshin sutra chanting

- ✓ 1. Hannya Shingyo(English)般若心経 (prajnaparamita Hrdaya sutra)
- ✓ 2. TeiDai Denpo Busso no Myo Go(Dhamma transmission lineage)遍代伝法佛相の名号
- ✓ 3. Hannya Shingyo 般若心経 The Heart Sutra of Perfect wisdom
Honzon Eko 本尊回向
4. Daihishu 大悲しゅ
Soshi Eko,Kaisan Eko 相師通回向、開山通回向
5. Hakuin Zenji Zazen Wasan 白隠禅師座禪和讃
Zaikel Eko 在家回向
6. Enmei Jikku kannon gyo(33Times)延命十句観音経
7. Shuku Sei Gan 四弘誓願文
The Bodhisattva vows (English)

Pali sutras パリ語経

1. Trisaran 三帰戒
2. Panchsheel 五戒
3. Buddha,Dhamma,Sangha vandana 三宝経

Meal Sutras 食事経

1. Ten Buddha name (Jyuu butsu myou) 十仏名
2. Five reflections (Go kan mon) 五観文

Discourse Sutras 提唱経

1. Daihishu(3 Times)大悲しゅ
2. kai kyou Ge 開経げ

前述した2009年の訪問時には17名いた塾生が、約1年が経過した2010年の本件調査時には8名になっていた。通常は、新聞広告を用いて6月頃に入塾生を募る。今期は、入塾受付時期にボディ師は日本に行き不在、留守預かりのB.Pragnya師は大学の試験を受けに他所に行っていたため、受け入れ体制が十分でなかった（通常は、60名くらい受け入れ、最初の1ヵ月ほどで自主的に退塾していく子弟がいるため、新規入塾から3ヵ月ほどの間で20名ほどになる由）。今期入塾当初は20人ほどいた塾生も、4ヵ月目を迎える10月には8名となっていた。

少人数ということを手にとり、本件調査では全員の塾生に家庭訪問を実施した。禅塾の立地するビジャプル市から車両で日帰りできる距離に実家がある者が7名（2名はビジャプル市から15km、1名は30km、3名は60km、1名は160km）、1名は日帰り不可能であった（ビジャプル市から300km）。8名全員の出自はホラヤ（Holaya）、母語はカンナダ語であるが、初歩的なヒンディー語は理解できる。かつて英語を教えるために外国人が禅塾に滞在したこともあり、初歩的な英語も使用できる。各塾生への自

宅訪問の前後には、ほぼ必ず地域の仏教徒集会が開催された。ボディ僧侶もしくはボディ・プラッギヤ僧侶が、ゲスト（つまり筆者）と塾生を伴って地域を訪問する旨連絡を取るため、地域有力者もしくは青年仏教会が集会をアレンジしていた。集会開催の主な流れは、本稿 2-2.において示したとおりである。

3-3. 塾生の家庭訪問

No.1&2 Kama Bodhi（以下 K.B.）および Bodhi Daya（B.D.）の家

場所：Ukumanal Shed（禅塾から南東 10km）

特記：2006 年、以前居住していた村が洪水で沈んだため、Gram Panchayat が割り当てた場所の仮設住宅（アルミトタンの壁と屋根、100 世帯）に移転した。SC（指定カースト）、OBC（その他の後進階級）、ムスリムがレーンを分けて混在する。2km 先に新しい村を建設中。一家庭あたり 2.5×2.5m の土間の空間に居住（台所込み、薪使用）する。この兄弟の家は、父（49 歳）母（30 歳）弟（6 歳）妹（4 歳）が同居。母方の祖父母の家も同じコミュニティ内にある。

入塾のきっかけ：家にいると父親に暴力を振るわれる。就学年齢であるにもかかわらず、この地域から学校へ行っている者はほとんどいない。

（Rs.:インドの通貨ルピー）

家族	年齢	職業	備考
父	49	タクシー運転手	酒飲みで家族に暴力を振るう。収入 Rs.120/日。
母	30	主婦・日雇い労働	夫とは親戚関係。収入 Rs.100/日。
K.B	13	7 年生・塾生	将来は医者になりたい。
B.D	11	4 年生・塾生	将来は警察官になりたい。
弟	6	未就学	母は禅塾に入塾させたいが、父は反対。
妹	4	未就学	——

No.3 Dhamma Kirti（D.K.）の家

場所：Gulbarga 県 Valamgi 村（ビジャプル市から北東 160km）

特記：父が 2010 年 6 月からドバイに出稼ぎ。村の中で多くの家庭がドバイ出稼ぎ経験（出稼ぎの収入で家を建てる）。

入塾のきっかけ：母の兄である地元有力者で地元パンチャヤト成員のアンバライ氏の紹介。

家族	年齢	職業	備考
父	30	ドバイで就業	職種は不明（少なくとも妻や近所の人は認識していない）。 ドゥバイで出稼ぎ中 Rs.2000Rs/月、銀行送金あり。
母	26	主婦	地元有力者 Ambarai 氏の妹。専業主婦。
D.K.	11	5年生・塾生	将来は学校教員になりたい。
妹	1	未就学	——

No.4 Vinaya Bodhi (V.B.) の家

場所：Sindagi（ビジャプル市内から東北東 60km）の Jai Bhim Nagar。集落内の仏教徒は 70/200 世帯。

特記：家庭内に TV あり、携帯電話あり、電気あり、冷蔵庫なし。Ashray Yojna（指定カーストへの行政による支援スキーム）で家を建てた。

入塾のきっかけ：父の弟＝ココナツのビジネスマンが V.B.を禅塾に連れて行った。Banteji の運転手 Mundappa 氏が禅塾を紹介。叔父が施設を見学しに来て決めた。

家族	年齢	職業	備考
父	38	水運び	10 年前、アンベードカルを知って仏教徒になった。 プラスチックポット 6 つを輸送して一回 Rs.15 の収入。 朝 5 時から夕方 6 時まで。何回運んでいるかはわからない。
母	32	市役所の清掃	結婚後、仏教徒になった。収入 Rs.4000/月。
姉	15	10 年生	学部修了まで行きたい。医者か教員になりたい。
V.B.	13	8 年生・塾生	将来は Dalit Nayakar（ダリットリーダー）になりたい。
妹	11	6 年生	女子の入学が許可されれば禅塾に入塾するかもしれない。
弟	8	2 年生	——

No.5 Prashant Bodhi (Psht.B.) の家

場所：Sindagi（ビジャプル市内から東北東 60km）の Jai Bhim Nagar。集落内の仏教徒は 70/200 世帯

特記：仏教徒ではないが、アンベードカルを知っている。家庭内に TV あり、冷蔵庫なし、電気なし。Prashant Bodhi の祖母の家（実家は Shalpur。父の死後、祖母の家へ移ってきた。現在は祖父が Shalpur で一人暮らし）。この家は借家。

入塾のきっかけ：V.B.父の弟（＝祖父の弟の息子）＝ココナッツのビジネスマンが Psht.B.を禅塾に連れて行った。

家族	年齢	職業	備考
父	—	—	死亡
祖母	50—55	市役所の清掃	—＜話を聞くことができません＞—
母	37	市役所の清掃	寡婦年金 Rs.400/月を含め、農業収入 (Rs.40/日×25 日程度) を合わせて Rs.1600/月程度。 結婚後、仏教徒になった。 息子に僧侶になってほしくはない。
姉	18	ホステルの料理人	結婚したが、夫が出て行く。
姉	16	既婚	夫の場所 (30km の距離) で暮らす。
Psht.B.	13	8 年生・塾生	将来はエンジニアになりたい。 村の 60 家族のうち 25 家族が仏教徒。 彼らが仏教寺院を建設した。 彼らが自分に敬意を表してくれる。
弟	11	6 年生	2 度禅塾に入れるが、戻って来た。

No.6&7 Dhamma Raja (D.R.) および Dhamma Gosh (D.G.) の家

場所：Kadani 到着 (Sindgi から 5km：ビジャプル市内から東北東 65km)。集落内の仏教徒は 40 世帯。

特記：仏教徒ではないが、アンベードカルは知っている (生誕祭などで)。家庭内に TV なし。

入塾のきっかけ：母の姉が Bijapur 在住で、「いい学校がある」と母に紹介。母が禅塾に入れる決断。

家族	年齢	職業	備考
父	35	クーリー (荷物運び)	20 代前半にムンバイで出稼ぎ→家を建てた Rs.150/日、日曜休日
母	32	クーリー	Rs.80/日、休日なし 姉が Bijapur 在住で、「いい学校がある」と紹介→学校という認識なので、僧侶にはなってほしくない

D.R.	13	7年生・塾生	将来は僧侶になりたい
D.G.	11	5年生・塾生	将来はリーダーになりたい
妹	9	3年生	—

No.8 Prasanna Bodhi (Psnna.B.) の家

場所：Berula 村（ビダル市内から 15km：ビジャプル市から 300km）。集落内 40～50 世帯のうち 2～3 世帯を除き、仏教徒。

特記：幹線道路から一番近い、村の入り口に家がある。家庭内に電気、TV、携帯電話、冷蔵庫なし。母は「仏教徒ではない」と言うが、日々の信仰形態を聴取すると、ヒンドゥーの神々ではなくアンベードカルとブッダを祀っている。書類上は「SC」（指定カースト）＝ヒンドゥーと登録。

入塾のきっかけ：夫の死から 1 年後、Bijapur 在住の母の友人（かつて自分の息子を入れていた）が禅塾を紹介

家族	年齢	職業	備考
父	—	—	2005 年死亡（体が痛いと言い出し、突然死んだ）。
祖母	75 ↑	無職	—
母	35	クーリー	クーリーは季節労働（6～8 月）。 禅塾をはじめは学校だと思っていた。 Psnna.B には僧侶でなく、稼ぎ手になってほしい。 (市の清掃業務 Rs.4000/月もある可能性あり)
Psnna.B.	14	9 年生・僧侶	将来はエンジニアになりたい。
弟	8	3 年生	—

塾生の最少年齢は 11 歳、最長年齢は 14 歳で、出身コミュニティは既に仏教徒であることもあれば、ヒンドゥーのままのこともあるが、すべての塾生の実家でアンベードカルを敬っている。したがって、コミュニティ全体が仏教徒という村の出身者もいれば、近隣に OBC やムスリム、カースト・ヒンドゥーと混在している村の出身者もいた。

アンベードカルについては 1 名（入塾当初 10 歳の最年少）を除く全員が禅塾に来る前から知っていた。ブッダや仏教に関しては全員が禅塾に来るまで知らなかったと応えた。

いずれの実家も、コミュニティ内では貧しく、扇風機・TV・冷蔵庫といった電化製品はほとんどない家庭だった。携帯電話も、働き手の男性を含め、誰も所有していない。子弟を禅塾に入れなければ義務教育を受けさせるのも困難な家庭であった。

3-4. 考察

塾生の家庭訪問を実施した率直な感想は、彼らの出身家族は経済的な困窮家庭だということだ。コミュニティの他の家庭に比較して、家も簡素で、モノが極端に少ない。我々の訪問に興奮したコミュニティ成員が携帯のカメラで写真や動画を撮る光景が比較的多かったが、塾生の家庭には携帯電話がなく、そもそも電気が通っていない場合が多かった。8名のうち2組は兄弟であるため、実質的には6家庭であるが、2家庭は父親が最近5年以内に死亡した純粋な母子家庭、別の2家庭は父親が生存はしているもののある種の「不在」家庭（1家庭は飲酒癖があり家族に暴力を振るって迷惑をかける父親であり、もう1家庭は出稼ぎ労働者で不在）であり、残る2家庭のみが父親が生活費を入れ、一家の大黒柱として機能している。しかし健全な父親のいる2家庭でさえも不安定な日雇い労働者である。ちなみに、ホラヤの伝統的職業に就いている者は、今回の調査ではいなかった。

そのようなコミュニティにおける脆弱家庭ではあるものの、親戚や友人・知人にコミュニティの有力者がおり、その人を介して禅塾という存在を知り、子どもの教育のために数十キロから数百キロ離れたビジャプルまで子どもを送っているということが共通点であった。禅塾は塾生募集に際して新聞広告などをするが、この8名に関しては、全員口コミであった。

禅塾がなかりせば、義務教育といえども受けられない家庭の子弟である。したがって親は、子どもと物理的に離れることの別離の悲しさはあるものの、それを我慢すれば、無料で12年生までの教育を受けさせることができ、食事をさせることができる。出身コミュニティにおいて12年生というのは学歴として非常に高く、公務員やエンジニア、医者といった社会的地位と経済的に安定する職種につくための最低限の学歴を保证することができる。

筆者は全員の保護者に、息子が僧侶になることを望むか質したが、今回家庭訪問した8名の親のいずれも、将来僧侶になってほしいとは応えなかった。返答の言葉を濁す場合もあったが、家計を支えるために学歴をつけ就業して欲しいと明確に述べる者もいた。これに対し、筆者は日本やチベット社会の例を引いて、僧侶でも教員、医者、弁護士、社会活動家などになっている者はいることを示したが、僧侶が俗人の仕事をも兼務することについては理解できないようであった。僧侶（という仕事）か一般の就業かの二者択一式の思考をしていた。仏教僧に関しては、生産活動に携わらない宗教活動をする人間と捉えているようである。

親の多くは禅塾を「寄宿学校」と認識しており、宗教施設とは知らない者もいた。したがって、自分の息子の剃髪した僧衣姿を初めて見たという者もいた。「びっくりしたけれど、ちゃんと教育を受けられるのであれば何も言わない」と述べたことも印象深かった。塾生本人たちも、僧侶になることを希望するのは2010年11月の調査時点で1名のみで、残りはエンジニアや教員などの職に就くことを希望した。

上記のように、禅塾はその理念において「アンバードカルについて学び、仏教的視座を持つ地域のリーダーとなる人材を育成しようとする試み」であるが、その実において現時点では困窮家庭のセーフティネットとしての性格が強いことがわかる。

4. 禅塾の土地と運営をめぐる問題

4-1. 禅塾の土地取得と運営をめぐる問題の経緯概要

禅塾の運営は、ボディ僧侶や塾生自身の就学意欲や社会改革に対する意欲といったソフト面が重要であることは異論を待たないが、寄宿制の生活を可能にするインフラの整備とそのハードを維持するためのマネジメントも欠かすことはできない。禅塾の運営を物心両面で支える地元在家仏教徒の支援実態を以下に述べる。

禅塾の運営を担う組織としては、1980年代に創設された Buddha Nirman Samiti (仏教寺院建設委員会。以下、BNS) があり、会長1名以下、常設委員10名で運営された寺院を建設・維持する目的を持つものがある。カルナータカ州に登録済みの組織で、会長 (President)、副会長 (Vice-president)、幹事 (Secretary)、副幹事 (Vice-secretary) 会計 (Treasurer) と6名の幹部 (Executive member) から構成される。初代会長は、後述する1980年代の土地取得の際に尽力した Jumnar 氏、現会長は、R.C. Kyatan 氏 (Additional Commissioner) である。

ホラヤはじめ仏教に関心を寄せる地元の被抑圧者の大多数は土地を持たないため、1980年代は、ビジャプル市とその周辺の仏教徒が協力して寺院建設のための土地取得に奔走した時期で、このときに BNS が創設された。1990年代半ばに政府の土地を BNS の名義に変更し、当時の委員が中心になって人々を動員した。加えてボディ僧侶他の寄付を投入し、現在の禅塾の基礎となる建物を建設した。その後、組織内部の事情により寺院の増築・修繕が停止している。

なお、本章における記述は、BNS の州政府への登録書類上での確認と、ボディ僧侶、禅塾を不定期に訪問してくる地元の仏教徒、塾生などからの聞き取り、およびこれら関係者が保持していた書類やノートを中心にまとめたものである。BNS 成員にも面会を申し込んで調査への協力を依頼したが、誰ひとりとも会うことができなかった。

4.2. 禅塾の土地取得の経緯

1980 年代～1994 年：土地取得へ向けて

- Marappa Kotek(軍人)、Marappa Sonari(不明)、Ayappa Shindur(教員)他 2 名の計 5 名が力を合わせて、土地を取得した。
- 元来政府の土地だった 2 エーカー弱の土地を、SC である Holaya 仏教徒の共有財産にするために尽力した。
- 政府から共有財産として譲渡が決まったものの、周りのカースト・ヒンドゥーが譲渡を認めず、さまざまな嫌がらせや圧力をかけてきたため、上記の 3 名が取得予定の土地の前に部屋を建て、住み込みで土地を監視した。
- 1994 年、ビジャプル出身の仏教徒でマハーラーシュトラ州の警察長官だった Vashvarinka Akashi 氏が 10 万ルピーの現金を用意して、正式に仏教徒の共有財産とした。

1995 年～2002 年：BNS メンバーによる土地の私物化

- 1995 年、地鎮祭を行った。
- 初代会長は、1980 年代の土地取得の際に尽力した 5 名の中から Jumnar 氏が就任した。
- 1990 年代には、土地取得に尽力した 5 名を追い出す形で当時 40～50 代の世代の有力者が BNS に参入した。
- 1995 年、BNS 新規参入者の A 氏(仮名)が、佐々井秀嶺僧侶をビジャプルの自分の勢力地域に招き、地所に建設した寺院の落慶法要を依頼した。このとき佐々井僧侶はホディ・ダンマ僧侶を伴ってビジャプルを来訪した。これがボディ僧侶がビジャプルと関わるきっかけとなった。
- BNS メンバーとホディ僧侶を中心に、寺院と青少年育成施設を併設する禅塾を建設する構想が出来上がった。
- 構想では、BNS メンバーは月額 500 ルピーを積み立て、また BNS メンバーがそれぞれの地所の在家信者に働きかけて禅塾建立のための寄付を募って経済面で支え、塾生の指導や寺院の管理など実務をホディ僧侶が行う、というものであった。
- 各メンバーはこの構想どおり民衆から寄付を集めたが、その資金のほとんどを自分や親族のために流用してしまった。寺院建設も予定より小規模になり、禅塾にいたっては塾生の宿舍すら建てられない状況であったため、ホディ僧侶が日本からの寄付(「菩提心を発こしましょう」の座禅会に出席した人たちによる寄付)で現在の寺院の基礎(50 万ルピー)と屋根(120 万ルピー)を支払った。
- 毎月 500 ルピーずつ(メンバー全員が積み立てれば毎月 5500 ルピー)の積み立ても全くなされなかつ

た。

2003 年～現在：停滞期

- 2003 年以降、禅塾の運営と寺院の維持費を賄うため、ホディ・ダンマ・コンプレックスという名称をつけた 8 軒の店舗を、一店舗につき月額 1,500 ルピーで貸し出すこととなった。店舗の建設費はボディ僧侶が支払った。8 店舗が全て埋まれば、月額 12,000 ルピーの賃貸収入を得られることから、禅塾の運営と寺院の維持費を十分捻出できる予定であった。コンプレックスについては、8 店舗中 4 店舗を BNS 委員自身もしくは委員の親族が賃貸した。残りの 1 店舗はボディ僧侶、他の 3 店舗は外部者が賃貸した。
- 開店当初から 2005 年 10 月までは、多少の遅延や不払いはあるが、BNS 委員は支払いを行っているものの、2005 年 11 月以降、今日まで一切の支払いが停止した状態である。現在は BNS 委員が賃貸する 4 店舗は全て不払い、ボディ僧侶の店舗には外部から携帯電話ショップが入り、他の 3 店舗にもそれぞれ借主がいる。月々の賃貸料をまがりなりにも支払っているのは、BNS 委員以外の外部者による 4 店舗である。
- こういった状況であるため、禅塾の電気・ガス・水道代、食糧費、塾生の学費、日用品代、賄い女性 2 人の雇用費など、運営費の全額をボディ僧侶が捻出している。これらの経済的な問題に対処するため、2011 年 2 月からボディ僧侶はビジャプル市周辺で月 4 回の托鉢を開始し、米や豆、金銭を托鉢して集めている。

4.3. 考察

現在の BNS は 60～70 代の世代を中心に運営され、彼らによる私物化が顕著である。その一方で、2002 年にビジャプル市で改宗した青年仏教徒(30～40 代)を中心に寺院に積極的に関わろうとする青年・壮年層がいる。彼らは BNS のメンバーではないが、機動性の面からも寺院の実情を最もよく知る立場にある。現委員は高齢者が多いため、世代交代の意味でも、今後青年層が寺院運営の中心を担うことになろう。現在のところ BNS の委員は現行委員の自薦・他薦で決まっているが、世代交代し、委員選出も選挙になって、停止している寺院の増築・修繕が再開されれば、さらに開けた組織となることが期待されている。

本件調査を通して、禅塾の成り立ちを知り、寺院建設までの経緯を明らかにすることができた。また、BNS の構造、内部における力関係、台頭する青年層との関係などを確認した。

5. 結論と課題

ビジャプルに位置するカルナータカ州をはじめ南インドでは、近年とみに幹線道路沿いにそびえ立つアンベードカル像をいたるところで目にするようになった。アンベードカルを信奉する被抑圧者層が多いのであろうことが見て取れる。ボディ・ダンマ僧侶の開催する集会や式典における布施にお札が混じるようになり、結構な数の出席者が携帯電話を所有している現状を見るにつけ、彼らの相対的な経済状態の向上を肌で感じるようになった。しかし、今回の調査で判明したように、個別に見れば、電気・水道、清潔なし尿処理施設がなく、政府からの支援もほとんど受けられていない層がいることもよくわかった。仏教を取り巻く社会状況の中に、経済的貧困は重要なファクターとして存在していることを、この一連の調査を通じて確認できた。

5-1. 得られた成果

禅塾は、原則的に仏教僧侶育成機関としての役割を持つ。10代の青少年を対象として、見習い僧としての共同生活を通して、学校教育と仏教教育を享受できる施設としての機能を有している。それを踏まえ、禅生およびその親族への属性を調べ、禅塾に入塾する子弟の家庭環境、入塾理由、実家における周辺コミュニティとの関係などを塾生本人とその親族の視点から聞き取り、仏教的青少年育成施設としての禅塾の役割・意味・ネットワークを検証することが本稿の目指すところであった。

得られた成果として、ポジティブ・ネガティブの両面を挙げることができよう。ポジティブな面としては、(1) 禅塾は南インドにおけるボディ・ダンマ僧侶の活動拠点としての役割を果たす。マハーラーシュトラ州などの仏教徒運動の活発な地域に比して仏教僧や仏教徒が圧倒的に少ない地域において、アンベードカルや仏教をまだよく知らない人々をエンパワーするスポットになっていることが判明した。南インド各地の仏教徒活動家がボディ僧侶に面会にくることもあり、異なる地域で活動する地域の仏教徒同志の交流の場としての役割も果たす。(2) 禅塾は教育施設であることから、経済的支援・人的支援を目的として外国人や地元以外の人々を引き寄せてもいる。ボディ僧侶が修行する日本の禅宗寺院や座禅会、その他ボディ僧侶を支援する全世界の人々の資金とマンパワーが禅塾に引き寄せられる。この意味でインドと日本をつなぐ結びの役目も果たしている。(3) 現時点における禅塾の主要な役割として、切実な経済問題を抱える脆弱家庭に対するセーフティネットとしての機能が最も重要である。これら脆弱家庭には、当該コミュニティの有力者が親戚・友人・知人としてコンタクトを取れる距離におり、禅塾を紹介されている。その地域有力者が禅塾の存在を知る契機は、ボディ・ダンマ僧侶の活動を知ったことに始まっている。彼らの多くは2003年のバンガロールにおける8万人の改宗式の前後に撮影されたVCD/DVDによってボディ僧侶の存在を知るに至っている。その2003年の改宗式は、1990年代後半から

のボディ僧侶による南インド 3 州における地道な啓蒙活動が結実したものである。禅塾が設立されたのも 2003 年である。(4) 禅塾は、将来の仏教徒社会を担う人材を育成する場としての役割も果たす。初期の塾生であったボディ・プラッギヤ僧侶が今や塾の運営側に携わり、カルナータカ州内における仏教徒の活動を先導するなど、徐々にではあるが、確実に人材が育ちつつある。ボディ・プラッギヤ僧侶も、当時 60 名ほどいた塾生の中の 1 人であった。僧侶になり、社会活動を担うまでに成長した。また、地域の有力者とまではいかないが、仏教青年会の中核メンバーを務める者は還俗したかつての塾生であったりする。

以上を総じて、禅塾は、仏式の儀礼を執り行いたい地元の仏教徒コミュニティもしくは仏教に強い関心を寄せるコミュニティの需要を満たし、かつ経済的に困窮する家庭の子弟を受け入れて教育・経済支援をするとともに、外国人を含めた外部者とのプラットフォームを提供する施設として機能している。

ネガティブな面としては、BNS の私物化が甚だしいことが判明した。現在、主に 60~70 代の BNS のメンバーにとって、最初に仏教徒運動の中心地としてのナグプル市で活躍していた佐々井僧侶をビジャプルに招聘したのは自分たちだという自負があり、佐々井僧侶の弟子たるボディ僧侶をこの師弟関係において軽んじる傾向がある。BNS とボディ僧侶の間にミスマコミュニケーションが生じると、ボディ僧侶との直接的な話し合いというよりも、佐々井僧侶へ仲裁を依頼するという事態になっている。今回の調査中に、BNS 会員への面会を申し入れたが全く実現しなかった。筆者が禅塾に滞在しつつ調査を行っていたため、ボディ僧侶側の人間と思われた可能性が高いが、筆者の調査目的や立場を説明する機会も持つことができなかった。地元の仏教徒も、地域の名士たる BNS 会員に異議を申し立てたり、世代交代を迫るようなことは、インドの伝統としても道徳的にもできないと感じている。他方、ある地元仏教徒からは「彼らは高齢だから、直に寿命が尽きるだろう」という発言もみられた。禅塾に集う仏教徒は、年功や地域における経済力、コミュニティに対する過去の貢献によって、BNS 会員としての地位を許しはするが、過去に集めた資金のほとんどが寺院運営に利用されていないこと等を不満に思うものの、直談判するなり、BNS からの辞任を迫るといった事態までは至っていない。現在のところ、BNS とボディ僧侶の間で取り決められた禅塾運営資金の調達方法や活用方法などに関する詳細を知るのは、地元の仏教徒の中でもボディ僧侶と近い数名のみである。BNS の不名誉になることまで喧伝することもないのだが、ボディ僧侶にとって禅塾の運営資金調達と運用は塾生がいる限り恒常的に発生するものであり、塾生やその家庭は費用を一切負担していないことから、ボディ僧侶一人の双肩にかかっている。特に寄宿生活を成り立たせるための費用の工面に非常に時間とエネルギーを投入しなければならないという点でかなりの負担になっている。上述した人間関係および財政的な理由により、禅塾は運営面での苦境に立たされている。ボディ僧侶や禅塾を経済的に支える在家信者の協力が不可欠である。現在の BNS とボ

ディ僧侶が和解する、もしくはBNSの民主主義世代交代が行われる等の事態にならない限り、今後は禅塾の存続そのものの脅かす事態に発展するかもしれない。

5-2. 今後の課題

何度も述べたように、塾生のネットワーク周辺には、当該コミュニティの有力者が親戚・友人・知人として配置されている。親戚や知人に有力者がいること自体、そのコミュニティ内においては本来影響力を持つはずの家庭なのかもしれない。たとえば、「父親が健在であれば」等のいくつかの条件が整えば、彼らは脆弱家庭ではなかったのかもしれない。

また、ホラヤはその内部に6層のサブカースト持つと聞いた（ちなみにマハールはその内に12と1/2のサブカーストを有する）。今回の調査ではこの詳細について確認が取れていないが、ホラヤ内におけるヒエラルキーが塾生となる際のフィルターの役割をしている可能性も否定できない。同一コミュニティ内におけるパワーバランスについては、今後の調査でつきとめてみたい。

今回の調査は、ビジャプル市の禅塾という極めて末端で起きている現象を明らかにするためのものであるが、ボディ僧侶は彼らのコミュニティとの交流を通して、着実に仏教徒運動を推進している。ミクロの活動がマクロと連動する萌芽がここにある。しかし、この構造解明は容易ではない。現代インド研究という大きな枠組みの中で、多くの困難を抱える下層民衆の全体像を描き出しつつ、かつ人々の抱える困難とそれを克服する試みが社会運動となって一定の動きを見せている仕組みと構造を捉えることができるのかという課題について、今後も挑戦し明らかにしていく。

以上

参考文献

- Zelliot, E., *From Untouchable to Dalit : Essays in the Ambedkar Movement*, Manohar Publishers & Distributors, New Delhi, 1998(1992).
- Enthoven, R. E., *The Tribes and Castes of Bombay Vol.II in 3 Volumes*, Low Price Publications, Delhi, 2008(1922).